

手で感じる芸術の価値

2021年12月20日(月) 読賣新聞 A12版 23面記事転載

触って楽しむ展示

美術館や博物館で作品を触って鑑賞する試みが注目されている。視覚障害者にとって「触覚」はモノを感じ取る重要な手段で、芸術鑑賞にもとりいれるねらいだ。新型コロナウィルスの感染予防の観点から、取り組みは困難に直面しているが、現場では試行錯誤が続いている。(栗原守)

興福寺の仏頭の複製(レプリカ)や、標高を立体化した富士山周辺の地図……。会場では訪れた家族連れなどが、展示品の質感や大きさ、凹凸を手で感じ取ろうとしていた。

大阪府吹田市の国立民俗博物館(民博)で9～11月、特別展「ユニバーサル・ミュージアム さわる!“触”の大博覧会」が開かれた。博物館や美術館では「作品に手を触れないでください」という注意書きが随所にみられるのが一般的だか、この特別展では視覚障害の有無に関係なく、誰でも触って楽しめる作品を集めた。

「触ることって大事だね」「よくこの時期に開催してくれた」。期間中、約2万7000人が来場し、アンケートには、好意的な意見が多く寄せられたという。

■コロナ禍で1年延期

特別展は、昨秋に予定されていたのが、コロナ禍で1年延期された。今週の開催にも「不特定の人が触る展示の開催は世間から批判を受けるかもしれない」との不安があったが、多数の消毒液を設置し、換気を強化。入場人数の制限などのできる限りの感染対策を徹底し、開催に踏み切った。

感染状況が改善した11月は、参加型の講座も開けるようになり、入場待ちの行列もできるようになった。

企画を担当した民博の広瀬浩二准教授は自身も全盲だ。当初はコロナ禍を想定していなかったが、「非接触」の広がりや、視覚障害者として看過できなかったという。

「自らの存在を否定されるような危うさを感じた。特別展を通じて触れることの価値と豊かな世界を訴えたかった」と話す。

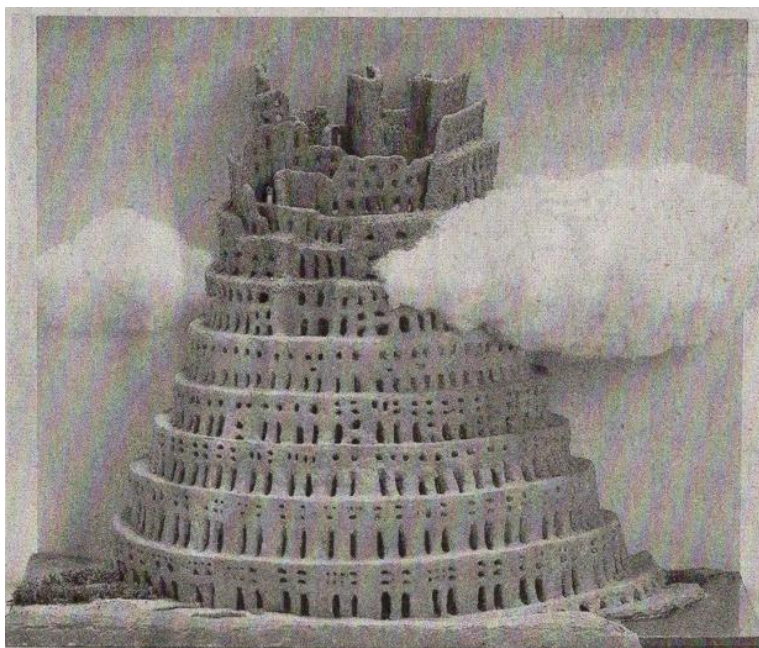


トキの触れる展示物と広瀬浩二郎准教授
(大阪府吹田市の国立民族学博物館で)

■ 絵画を立体化

特別展には京都市立芸術大の学生が、絵画を立体化した二次創作を出展した。

池松奏さん(4年生)は、ピーテル・ブリューゲル1世の「バベルの塔」を立体化し、「塔の下から上に向かって硬さが変わるように、複数の粘土を使い、触感で高層建築を理解しやすいように工夫した」と話す。エドバルド・ムンクの「叫び」の立体化に挑んだ稲岡莉々さん(同)は「創作を通じ、自分にこれまでなかった『触れる』という感覚を学ぶことができた」と、手応えを語った。



池松さんが立体化した「バベルの塔」の二次創作



広瀬准教授は「視覚障害者の気持ちを追体験するための『触る鑑賞法』ではなく、『触る』ことの面白さや価値を体験できるような施設づくりに挑戦していきたい」と話している。

障害者目線 鑑賞の「形」探る

2018年に施行された障害者文化芸術活動推進法には、国や自治体が、障がい者が文化芸術施設を楽しめるように施設を整備するよう求めているが、取り組みはまだ途上だ。

日本博物館協会の調査報告書(19年度)によると、全国の4178館を対象に障害者向けの施設改善の取り組みを調べたところ、「障害者に対応したエレベーターの設置」をししている施設は43%にとどまった。「手話対応等、聴覚障害者に対する対応」は13%、「視覚障害者用展示解説の提供」は7%と低かった。

施設面のバリアフリー化にとどまらず、視覚障害者に楽しんでもらうための芸術鑑賞法を模索する動きもある。京都国立近代美術館(京都市左京区)では17年から、「感覚をひらく」と名付けた事業を続けている。専用の美術教材の制作や、視覚障害者を交えたグループ鑑賞会の開催などを重ね、視覚障害者、作家、美術館の3者が新しい形の芸術鑑賞を模索している。

コロナ禍で事業は一時中止を余儀なくされたが、今年夏ごろから、作品に触れる人数を限定するなどして、体験型講座を再開しているという。

担当の松山沙樹・特定研究員は「目の見えない人の指先の感覚は繊細で、鑑賞後の感想を聞いて改めて『触る』世界の豊かさを感じている」と話す。